サダン・トラジャ族の社会統合

——地縁集団の自立と宗教の社会的機能をめぐって——

秋　野　晃　司

I　はじめに

インドネシア共和国は，地理的に多島国家であり，また多種族国家である。各々の種族はインドネシア語という共通語をもちながらも，なお独自の言語と慣習を維持しながら地域社会を形成している。しかしながら，このような種族社会も，いつまでも孤立的・慣習法的地域社会を形づくっているわけにはいかない。インドネシア政府は「多様性の中の統一」というスローガンのもと，多種族性，地域的特性に政治的配慮をしつつ，むら社会の開発，近代化，そして国家統合をすすめてきた。これら外部からの様々なインパクトに対して，種族社会は「抵抗」「適応」「崩壊」のプロセスを経ながら，着実に変化している。かといって，種族社会あるいは地域社会が，国家のインパクトや圧力によってすべて変わるというものではない。種族社会の人々が，この外部からのインパクトを彼らなりの合理性で受容し，彼ら自身が彼らの社会を意識的・無意識的に再編成していると考えるべきであろう。

本稿ではこのような事実を考慮しながら，筆者の2度にわたるインドネシア村落実態調査[(1)]にもとづいて，スラウェシ島中央部に居住するサダン・トラジャ族の社会統合と，その社会的変化の問題をとりあげる。特に，土着的宗教にささえられた慣習法的秩序原理にもとづく地縁集団の統合と，自立を検討し，そこに20世紀初頭に入ってきたキリスト教が，どのような社会的機能を果し，どのような変化をもたらしたのかを考察する。

II　サダン・トラジャ族の概況

マラヤ・ポリネシア語族のトラジャ族は，インドネシア共和国のスラウェシ島(旧セレベス)中央部に居住している。彼らは，中部スラウェシ北西部の小都市パルー周辺に居住する「西トラジャ族」，北東部ポソ周辺の「東トラジャ族」，中央部サダン川上流地域の小都市マカレー，ランテパオ周辺の「南トラジャ族」に３分類される。[2] 筆者が調査対象としたのは「南トラジャ族」で，エスニック・グループとしてはサダン・トラジャ(Sa'dan Toraja)族と呼ばれている。現在の行政区分では南スラウェシ州タナ・トラジャ県(Propinsi Selawesi Selatan Kabpaten Tana Toraja)に住む人々である。タナ・トラジャ県は南緯２度40分～３度25分，東経119度30分～120度25分の範囲にあり，面積3,631㎢，人口は33万476人である。[3]

タナ・トラジャ県の地形は，小都市ランテパオ周辺が盆地状の平地で，他は海抜700ｍ～2,000ｍ余の山岳地帯である。それゆえ，集落は山の傾斜地に沿って形成されている。気候は熱帯モンスーン地域のため，雨季・乾季の区別がある。11月～５月が雨季，６月～10月が乾季となる。しかし，乾季といっても降雨の少ないのは８月～９月の一時期で，他は毎日降雨があり，比較的水に恵まれた地域である。気温は，赤道直下ではあるが高地であるため，最高30度前後，最低16～20度と日較差が大きい。

このような地形・気候条件のもとで行なわれている主なる生業は稲作で，焼畑は見られない。調査地域の稲作は，山間部特有の緩斜面を利用した狭い棚田での単作である。(なお，比較的土地の低いタナ・トラジャ南部地域から二期作が広がっている。) 農事暦は，11月～12月にかけて播種，12月末～２月中旬に耕起，田植を行なう。３月～４月は田草とり，５月末～７月中旬にかけてが稲刈りである。農事暦において各農作業の時期に幅があるのは，山岳地形のため，日射量・標高の差違によって気温・水温がちがうことによるずれである。

調査地域は，既述したごとく降水量に恵まれているため，土地の傾斜

を利用した自然灌漑で，特別な灌漑設備はない。それゆえ，それに関係した社会組織は発達していない。

農業労働は，簡単な農具を使用するほかは人力に頼っている。農具は耕起で先端部鉄製の掘棒(Pesese)，鍬(Bengken)を用い，しろかきでは竹を弓形にしたカレックという道具を使用する。稲刈りはアニアニと呼ぶ刃物を使い，穂刈りである。トラジャ人は牛馬を農業労働に使用する知識をもってはいるが，馬は荷物運搬，水牛は高価な物(水田，家屋，墓)との交換財として，また儀礼時の供儀，あるいはむら人相互の贈答用の肉として使う以外使用しない。農業労働の性別分業は，慣習として，耕起・しろかきは男性，田植・稲刈りは女性が行なっている。賃金による農業労働力調達，及び労働力交換(Sisalow)もあるが，調査地域スセアンの1戸あたりの水田所有面積は0.25ha未満と狭く，家内労働中心でまかなう。[4] なお，稲刈りの労働力は特別な慣習システムで供給される場合がある。既述したようにこの作業の中心は女性と子供であるが，彼らは大土地所有者もしくは帰属する出自集団のメンバーの水田で，土地の所有者の承認のもとに稲刈りを行ない，稲束の分与を受ける。受け入れる側は原則的に来訪者を拒否することができず，親疎に順じて10～20%の割合で稲束を支払う。相互扶助的慣習の一形態と考えられる。

家畜は水牛，豚，鶏が飼育されているが，これらは日常的に食するために飼われているのではなく，儀礼における供物(犠牲獣)として，また儀礼時の共食，贈答用として飼育されている。なお水牛は，既述したごとく交換財，すなわち貨幣としての役割もある。

換金作物としてコーヒー，さとうやし栽培が行なわれている。コーヒーは17世紀初期にアラブ商人によってもたらされ，トラジャ地域東部のブギス人(Bugis)のルー(Luwu)王国の支配のもとで，コーヒー豆の貿易が行なわれていた。1830年以降はオランダ人により栽培が拡大され貿易がなされた。[5] インドネシア共和国として独立後は，地域内での消費と華僑系の商人による売買が主であったが，1975年からは日系企業トアルコ・

ジャヤによって買付けと輸出が行なわれている。1970年時，栽培面積は1,690haであったが，1978年にトアルコ・ジャヤが300ha余のコーヒー農園をペダマランに経営し始めたので，栽培面積は広がっている。しかしながら，調査地域におけるアラビカ種の樹木は古木であり，またむら人がコーヒー栽培をあくまでも副業とみなして，増産に力を入れていない。そのため1980年現在の生産量はトアルコ・ジャヤの買付量約80万tで，村人の消費量を考慮してもその額は高くない。またさとうやしからはヤシ酒(tua)をとり，村あるいは小都市ランテパオの市(Passar)にて売買されている。

トラジャ族の家族は，親子を中心とした世帯を構成する。事例として自然村(Kampung)バツツモンガ61世帯の世代構成をみると1世代が2世帯，2世代が33世帯，3世代が26世帯である。このうち3世代にわたる家族の実態は，世帯主夫婦の親夫婦が同居しているのは4例のみで，残りは寡婦・寡夫，あるいは離婚等によって配偶者を失なって，子供夫婦と同居している例である。1世帯あたりの家族数は平均6人である。

親族関係は双系的(bilateral)で，宗教儀礼上重要な役割を果たす出自集団パラプアン(pa'rapuan)は，トンコナン(Tongkonan)と呼ばれる居住家屋の創設者を共通の祖として形成される。この出自集団(bilateral descent group)のメンバーが新たにトンコナンを創設すると分節の出自集団サンガラプ(Sangrapu)が形成される。これらの出自集団はトラジャ地域社会に網の目状に広がり，社会関係の核となっている。

宗教は，アニミスティックな土着宗教アルク・ト・ドロ(Aluk to dolo)と，今世紀初頭に入ってきたキリスト教が中心である。統計によればキリスト教徒は250,820人(プロテスタント211,716人，カトリック39,104人)，アルク・ト・ドロが57,908人，他にイスラム教徒21,716人，ヒンズー教徒8人，仏教徒23人となっている。[6] 数の上ではキリスト教徒が多く，土着宗教を信仰する人は，1970年に政府の公認を得たにもかかわらず減少傾向にある。

III　サダン・トラジャ社会の地縁集団

インドネシア政府は，独立後，地方行政組織の整備確立を行なってきた。現在，サダン・トラジャ族の居住している地域は，南スラウェシ州タナ・トラジャ県として，近代的行政機構のなかに組みこまれている。さらに，この中は9の郡(Kecamatan)，そして65の行政村(Desa)に分かれる。この郡・行政村の規模を調査地域にみると，スセアン郡(Kecamatan Sesean)は442.74km²，人口41,818人であり，11の行政村デサを含んでいる。調査行政村スセアン・スロアラ(Desa Sesean Suloara)は面積37.44km²，人口5,473人である(1980年現在)。郡には県知事(Bupati)の任命による郡長(Camat)，行政村にはむら人の選挙による村長(Kepala Desa)がおかれている。

一方，以上の近代的行政機構に対して，伝統的地縁集団が存在する。この集団は，行政村デサに包括された地縁集団と，デサの枠を越えた慣習法コミュニティー(Adat community)がある。前者の集団をデサ・スセアン・スロアラにみると，このデサのなかはカンプン(Kampung)と呼ばれる16の自然村に分かれ，そのカンプンはサロアン(Saroan)[7]と呼ばれる地縁集団に分かれている。世帯数の少ないカンプンでは1サロアンということもあるが，一般に2～3のサロアンに分かれ，スセアン・スロアラでは32ある。このサロアンの世帯数の規模をカンプン・バツツモンガを例にとると，サロアン・パダン33世帯，サロアン・セポン28世帯である。この分け方は，血縁的原理では構成されておらず，地形的にカンプンの東西を走る道路を境界線にして南北に分けており，地縁的原理によるものである。

一般に，サロアンは観念上の共通の祖先から導かれるメンバーによって成り立っていたと言われる。しかしながら，時代が経るに従いメンバーが増加し，現在では地縁集団として機能するようになった。

この集団の重要な社会的機能は，葬送儀礼における水牛肉，豚肉の分配対象組織である。トラジャ族の葬送儀礼では，社会的価値の高い水牛，

豚を供儀という形をとって屠殺し，むら人，親族にその肉を贈与する。その時遺族は，死者の出生サロアン，婚姻後の居住サロアン，あるいは両親のサロアンに，生前の配慮と協力を感謝して贈与を行なう。[8] 遺族にとってこの肉の贈与を行なわないことは，社会関係の断絶を意味する。たとえば，スセアン・スロアラ村にはコミュニストといわれる人が35人存在するが，この人達には現政権への気がねから肉の贈与はしない。[9] ところで，贈与を受けたサロアンは，肉をともに分けあうことによって，メンバーの社会関係を円滑にし，集団のまとまりと自立化を促す。それゆえ，この集団は相互扶助的関係をもっている。たとえば，家屋建材を強化するため泥水に浸ける作業の労働奉仕，あるいは葬送儀礼場づくりの作業協力等がある。また，ランテパオ周辺においては，日本社会の「ゆい」と同様，農業協同労働組織として機能していることが報告されている。[10]

ともあれ，サロアンはトラジャ社会の最小で基本的な地縁集団である。次にサロアンよりひとまわり規模の大きいカンプンについて検討する。

一般に，カンプン(Kampung)は「村」と訳されるが，その実態はサロアン同様変貌過程にあるだけにとらえにくい。しかし，この集団が行政上区分されたデサ(Desa)とは異なり，トラジャ人が生活の必要性から，また日常的な社会関係をもつのに適切な範囲としてつくりだした自然村であることは確かである。そして調査から，カンプンもサロアン同様，血縁にもとづくものでなく，地縁にもとづいた集団である。

このカンプンの統合性を，カンプン入りとその成員の儀礼行動に実態をみてみたい。

カンプンの成員権を得るためには，豚を一頭以上屠殺して成員と会食をし，社会的認知を受ける。この時，土着的宗教者(Aluk to dolo)であれば祭司者トミナー[11]が鶏，豚を屠殺し，それを供物として神々にそなえる。土地の神，あるいは祖先神に承認を得る行動である。一方キリスト教徒の場合は，牧師あるいは牧師代行の教師によって，今後の新しい生活への幸せが祈られ，会食がなされる。また，一般的なキリスト教式

葬儀では，親族およびカンプンの成員によって儀礼が遂行される。大規模な葬儀になると上記のようにはいかないが，葬儀に関係する参加者はカンプン単位で座席を設けたり，弔意を表わす行動をとったりする。他に，土着的宗教における世界観では，カンプン内にいまだ葬儀を終えない死者が存在すると，マネネ（ma'nene）と呼ばれる祖先供養やマブア（ma'bua）と呼ばれる豊穣儀礼を行なえない。すなわち，宗教的空間でも，カンプンは意味をもっている。

またカンプンのまとめ役として，男性の長（Kepala kampung）が話し合いによって選ばれる。彼の仕事は，行政側業務のむら人への伝達，税の徴収，カンプン内の小道の草刈りである。そのほか，キリスト教式の葬儀においては，肉の分配，せり売買の役目を果たすことが多い。彼の長としての報酬はカンプンで徴収した税の5％で，他に葬儀における水牛肉，豚肉の分配を多目に受けることができる。しかしカンプン内での他の権限は限定されている。彼は，伝統的支配階層や，新しい支配階層である教師，行政関係者の意向を無視することはできない。

以上のことから，カンプンが地縁にもとづいた自然村であることは確かであるが，鈴木栄太郎が指摘する日本農村社会の自然村「部落」にみられるような自立性，閉鎖性[02]は弱い。その理由は3点考えられる。第一に，居住家屋トンコナンを共通の祖先とした双系的出自集団（bilateral descent group）の成員がカンプンの内外に存在し，この成員の協力関係がある。第二に，むら人として守られねばならない慣習法はカンプン，デサの枠を越えて存在すること。第三に，スハルト体制になって，行政庁がカンプン掌握を強化し，行政の末端機構として位置づけられてきた。たとえば，デサ・スセアン・スロアラは人口増加，コーヒー栽培，開墾等による農業経営の拡大にともなって集落が広がっていたが，1969年以前は3カンプンであった。しかしこの年に2分割され6カンプンに，1977年には16カンプンに分割される。現在1カンプンの世帯数をカンプン・バツツモンガにみると61世帯360人である。なお，カンプンの規模の歴史的変

化は行政側のカンプン掌握のためだけとはいいがたく，カンプンの統合性からカンプン内部の意向と一致したためでもある。しかしながら，行政府のカンプン介入が集団の自立性に影響を与えていることは否めない。

次に慣習法コミュニティー(Adat community)について検討を加えよう。これはトラジャ人が共通の慣習をもっていると認識している領域である。タナ・トラジャ県では32に分かれている。[9] 共通の慣習の多くは，伝統的宗教によって裏づけられている。儀礼過程は慣習法コミュニティーごとに少しずつ異なっている。そして慣習法をやぶるものはこの領域からの追放となる。一例をあげると，スセアンではタブーとなっている第1イトコ同士の婚姻をなした場合，慣習法コミュニティー内には住めなくなる。ただし子供が出生して，豚の屠殺を行なってカンプンの人と会食儀礼をなせば復帰することができるという，寛容な救済措置もともなっている。

この領域の人が現実に目的性をもった共同行動をとるということはないが，精神的側面では彼らにとって気心の知れ，安心して社会関係をもてる人達の社会的空間である。カンプン・バツツモンガの世帯主の婚姻圏の調査でも，全例が同じコミュニティー内のメンバーとの婚姻であったことからしても，上記のことが裏づけられ，トラジャ人の日常生活上の付き合いの最大限の範囲と考えられている。[10] なお現在，キリスト教化によって，慣習法を支えてきた伝統的宗教体系が崩壊，変容してきているため，他の慣習法コミュニティーとの差異が無くなる傾向があることも注意しておかねばならない。また，1981年から小都市ランテパオ，マカレーを中心にテレビが入ってきたが，今後文化的変容の上でこの影響も考慮しなければならないだろう。

以上，サダン・トラジャ社会の地縁集団を検討してきた。サダン・トラジャ社会においては，伝統的社会組織サロアン，カンプン，慣習法コミュニティーに対して，近代的行政組織デサ，クチャマタンが交錯しながらかみあって，トラジャ地域社会を統合させている。

Ⅳ　サダン・トラジャ社会の宗教

サダン・トラジャ社会のおもな宗教は，アニミスティックな土着宗教アルック(Aluk)またはアルック・ト・ドロ(Aluk to dolo)とキリスト教である。以下，この2つの宗教を中心に論を進めたい。

まず，土着宗教アルック・ト・ドロであるが，1970年にインドネシア政府はこれを合法的宗教と認めた。タナ・トラジャ行政当局も政府の意向と，トラジャ観光政策推進の立場から，様々な儀礼に支えられるこの宗教に配慮をしている。にもかかわらず，アルック・ト・ドロと公称する人は，1970年118,527人(タナ・トラジャ全人口の38%)，1975年97,336人(同30%)，1980年57,908人(同18%)と，統計的には減少傾向にあるのが現実である。[15]

調査地域におけるこの宗教の「神」観念は，創造神のプアン・マツア(Puang Matua)，精霊神のデアタ(Deata)，祖先神のネネ(Nene)が考えられている。デアタとネネはいたる所に存在すると考えられ，この神神によって宇宙秩序は保たれている。もし慣習にもとづいた神々への儀礼を怠ったり，違反行為をなすと，現世の安寧と繁栄は崩壊し，災いをもたらすことになる。また来世での生活も保証されない。それゆえ，トラジャ人にとって心の安寧の為に宗教儀礼を忠実に果たそうとする。この神々へのかかわりは彼らの社会生活を律する行動規範となり，地域の社会秩序を構成する。

伝統的宗教儀礼の体系は，西側の儀礼(Aluk rampe matampu)と東側の儀礼(Aluk rampe matallo)，そして両者の境界に存する儀礼(特別な名称はない)としてのマネネ(Ma'nene)に3分類される。西側の儀礼は隠喩的に「下降する煙」(Rambu solo)ともいわれ，「死」の儀礼，すなわち通過儀礼としての葬送儀礼である。これに対する東側の儀礼は「上昇する煙」(Rambu tuka)といわれ，「生」の儀礼，すなわち神々に対する豊穣祈願，病気治癒祈願，悪霊祓い，再生儀礼等である。東西に属さないマネネの儀礼は祖先供養の意味をもっている。このマネネの儀礼の位

置づけの問題はあるが，この社会の宗教体系は二項対立的と考えてさしつかえない。

以上の宗教儀礼のプロセスは，念入りで様々な形態をとっているが，地域社会の統合との関連で特徴をとりあげれば，社会的価値の高い水牛，豚を供儀という形をとって屠殺し，むら人に贈与することと，この肉による会食である。肉の贈答慣行，消費行動は，モースの指摘するポトラッチであるが，[16] トラジャ社会にあっては特に社会秩序の維持，地域社会の統合に大きな役割を果たしている。また会食では，ともに肉を分けあい食する共同行動が，サロアン，カンプン，あるいは出自集団の成員としての確認と連帯を強める。この２つの事柄はキリスト教の儀礼にももちこされており，たとえキリスト教化によって儀礼過程は大きく変化したにもかかわらず，トラジャ地域社会のまとまりのためには欠かすことができなかったに相違ない。[17]

次に，キリスト教についてみてみよう。タナ・トラジャ地域にキリスト教が入ってきたのは1913年である。この時の教派はプロテスタント系のオランダ・キリスト教伝導普及協会（The Dutch Christian Reformed Missionary Association）で，宣教師ファン・ルオスデレハット（Van Luosdrechat）が最初の人であった。[18] 当時のトラジャ地域は，1906年にオランダ政府の武力支配があり，ポンティク[19]等のトラジャ人の武力抵抗が行なわれた直後で，反オランダ感情が強かった。事実，彼は布教活動に入った直後にトラジャ人によって殺害されている。しかしながらその後，宣教師達によってマカレー，ランテパオの小都市を中心に，医療活動，教育活動を通して布教活動が行なわれた。特に，トラジャ語による聖書，祈祷書，讃美歌の作成，そしてトラジャ人の牧師の育成を行なった。また，小・中学校の教師に牧師代行の役割を担わせ，葬儀等の儀礼で祭司者として布教活動をさせた。その結果，キリスト教に改宗したものの数は，1942年約40,000人，第２次世界大戦後の1947年75,000人，1968年約185,000人，[20] 1980年250,820人と，確実に増加している。

それでは何故，土着宗教者は減少し，キリスト教に改宗する人が増加しているのであろうか。

まず，トラジャ人にとってキリスト教の受容は，社会生活上の合理主義にもとづくという側面がある。たとえばキリスト教学校教育では様々な知識を教え，新興支配層である教師職，行政職に就く条件をそなえさせた。また土着宗教は多種の儀礼，様々なタブー，差別的構造を課し，そのうえ儀礼遂行のための経済的負担も重く，拘束感を与えていた。これに対しキリスト教は，儀礼の過程の簡素化，もしくは廃止を進めた。さらに，地域社会が自己完結的に生存しにくくなっている状況において，地域外，あるいは国家との関係における合理主義も考慮しなければならない。現在の政府，国家との結びつきを重視する新しい支配層，すなわち行政職，教師職にある人達は，現政府を支えるゴルカル(職能集団)に帰属し，トラジャ地域社会の開発，近代化とキリスト教化が重なり合うものだと考えている。また彼らは，必然的に対外的な接触をもつ機会も多く，その際には世界的宗教であるキリスト教徒であるほうが信用度も高く，便宜がよい。特に1965年9月30日事件以降は，コミュニストと区別されるためにも必要であった。以上がキリスト教受容の合理的側面であるが，このことに関してはイスラム教と土着宗教の問題にも少し触れねばならない。サダン・トラジャ族の周辺の種族が16世紀からイスラム化していくなかで，この地域だけは非イスラム社会を維持した。この理由は，地理的に内陸部で閉鎖的地域であること，またイスラム教では豚肉を食さないなど慣習的にかけはなれていたこと，さらに周辺のブギス族による支配を嫌ったことなどである。これをキリスト教布教の立場からみれば，イスラム教の堅固な信仰は力による衝突を起こしやすく布教に困難をともなうが，トラジャのように非イスラム社会を維持しているところは「介入」が容易であったと考えられる。

このような状況下で，1952年から1964年にかけてブギス族の反キリスト教主義者がサダン・トラジャ地域の教会と住宅を焼き打ちするという

事件をおこした。[20] この事件はトラジャ人に反ブギス，反イスラム感情をおこさせ，結果としてキリスト教布教を一層しやすい状況にしたことも考慮しなければならない。

以上，キリスト教の布教と受容の側面を検討してきたが，それではキリスト教は土着宗教の何を崩壊させ，何を摂取してサダン・トラジャのキリスト教を形成しているのであろうか。他方土着宗教は，キリスト教の侵入によってどのように変化し，ひいてはトラジャ地域の社会秩序にどのような変化をもたらしているのだろうか。

まず，アルク・ト・ドロの宗教儀礼に対するキリスト教の対応をみてみると，キリスト教は西側の儀礼，すなわち葬送儀礼のランクを廃止して儀礼の過程を簡素化した。高位のランクの伝統的葬儀では儀礼が1ヶ月余も続けられるのに対し，[22] キリスト教葬儀では富裕層でも3日間で儀礼を終えるのが一般的である。キリスト教式葬送儀礼で，伝統的宗教儀礼行為を継承している主要なものは，先に若干触れたが，水牛と豚の屠殺，むら人と親族への肉の贈与，会食，そして死者を布地で巻いて岩壁の墓穴に納めることである。

また，キリスト教が廃止した儀礼はマネネ，及び東側の儀礼の大半である。キリスト教が残した東側の儀礼は，トンコナンと呼ぶ居住家屋の建築に関する儀礼，収穫感謝の稲作儀礼，そして結婚式である。これらの儀礼もやはり儀礼過程は簡素化され，土着宗教の祭司者達は遠ざけられている。トンコナンの建築儀礼では，豚肉のむら人への分配と会食が，他は会食が中心となる儀礼である。

なお，キリスト教の信仰の要である「神」は，土着宗教の創造神の呼び名をそのまま用いてプアン・マツアとし，御子イエス・キリストをおもに信仰の対象として重んじている。他の精霊神，祖先神達が遠ざけられているのはいうまでもない。

他方，キリスト教が土着宗教に変化をもたらしたものに穢れの観念がある。「穢れ」はトラジャ人の行動を規制する力をもっていたが，キリス

ト教徒になった人々はこれを問題にしなくなってきている。一例をあげると，葬儀で得た水牛の肉を食べてから水田へ行くと，稲の実りが悪くなるとされていて，一晩たってから，もしくは少なくともいっとき睡眠をとってから水田に行くならわしがあったが，キリスト教徒でこれを意に介するものは稀である。

以上のことから理解できるとおり，キリスト教がアルク・ト・ドロの宗教儀礼体系をかなり崩壊させたことは事実である。とはいえ，キリスト教はトラジャ人の社会関係の維持，及び地縁集団の結束のために欠くことのできない水牛肉と豚肉の贈答慣行は認知せざるをえず，これを継承したことで，トラジャ風キリスト教が形成されているものと考えられる。

V　地縁集団における宗教の社会的機能

これまでサダン・トラジャ社会の地縁集団の性格と，この社会の主要な宗教である土着宗教アルク・ト・ドロ，及びキリスト教について検討してきた。ここで，地縁集団における宗教の社会的機能について考え，その自立性を検討してみたい。

既述したごとく，この社会の地縁集団には伝統的社会組織としてサロアン，カンプン，慣習法コミュニティーがあり，近代的行政組織としてデサ(行政村)，クチャマタン(郡)がある。トラジャ人は日常生活上これらすべての社会組織にかかわりをもち，そして必要性に応じて機能的に対処しているわけである。

多くのトラジャ人にとって，サロアンとカンプンは重要な社会集団である。この地縁集団の成員の結束と円滑な社会関係を維持していくうえで重要な役割を果たしているのが土着の宗教儀礼行為――水牛肉と豚肉の贈答慣行及び会食――であることは既に述べた。キリスト教の葬送儀礼もこれらの行為を取り入れざるをえず，このようにサロアン，カンプンの自立を守るうえで宗教は主要な因子となっている。一方このように伝

統的宗教，あるいはキリスト教の儀礼行為に支えられたサロアンやカンプンは，しかしながら個別的に自立しているわけではなく，さらに近代的行政組織デサと機能的にかみあい，同時に慣習法コミュニティーの領域を意識しながら，タナ・トラジャ県の中にひとつの地域社会をつくりあげている。そしてこの地域社会が連合して，サダン・トラジャ族という種族原理にもとづいたより大きな地域社会を形成しているのである。サダン・トラジャの地域統合は以上のような枠組の中で考えられる。

トラジャ社会の自立性は，しばしば行政法よりも土着の宗教儀礼に支えられた慣習法を優先することで維持されており，文化的側面に限定していえば反国家的でさえある。たとえば，土地の相続は葬送儀礼で屠殺する水牛の提出数で概ね決まる。[23] また筆者の調査中，1981年4月より，インドネシア政府はギャンブル追放策の一環として，この地で好んで行なわれている闘鶏を全面的に禁止してきた。しかしトラジャ人は，「ジャカルタ政府」の政策であり，トラジャとは無関係であるというように，葬送儀礼や農耕儀礼の合い間に慣行として，また週ごとに日を決めて娯楽として行ない，とり止めることはなかったという例もある。

このような事実は，国家に対し，トラジャ社会あるいは社会を構成する地縁集団の自立性を証明するものであるが，だからといってこの社会が独立地域であるということではない。しかし，トラジャ人が言った「ジャカルタ政府」という言葉が表わしているように，国家意識はうすく，逆にトラジャ地域主義は強い。

こうした状況に対して必然的に，行政側は国家意識を高めようとして学校教育の中では勿論のこと，キリスト教の儀礼中でも国家との結び付きを強調することがある。具体例としては，新築儀礼で牧師の代行を勤める教師が，その建物の建てられた土地に関して，インドネシア共和国の中での地理的，行政的位置を強調したり，また伝統的豊穣儀礼においてもタナ・トラジャ県の行政職員が，その儀礼がインドネシア政府の公認下で行なわれていると演説したりする。

新しい支配層である行政職，教師職にある人々が，このように国家との結び付きを重視させるべくとる行動が，どの程度トラジャ人に国家意識をもたせ，そしてトラジャ地域社会の統合にどのような影響を与えることになるのか，その結果が出るにはもう少し時間が必要である。ただし，土着宗教に支えられたトラジャ内部の慣習法コミュニティー等の地縁集団の各々の独自性は，キリスト教の影響で失なわれつつある。

Ⅵ　おわりに

以上，サダン・トラジャ社会の社会統合の問題を，この社会の様々な地縁集団と宗教の社会的機能を中心に検討してきた。その結果，この社会では今なおアニミスティックな土着宗教が，地縁集団を統合させるうえで大きな役割を果たしていることが検証された。今世紀に入ってきたキリスト教も，水牛肉や豚肉の贈答慣行，及びその肉による会食という伝統的な宗教儀礼上の行為を摂取せざるをえなかった。

トラジャ・コミュニティーを統合させる役割をになう土着宗教，あるいはそれに支えられた慣習法は，地域性，種族性を強調するゆえに，他種族，ひいては国家に対して自立的・文化的抵抗を示す。一方キリスト教は，土着宗教の体系を徐々に崩壊させている。特に新支配層である行政職・教師職にある人々は，キリスト教化と，発展と進歩を意味する近代化とを重ね合わせて認識しており，同時に国家との結び付きを重視している。今後，支配層のもつ近代化志向，およびキリスト教化の強まりが，結果として土着宗教に支えられたトラジャ社会内部の地縁集団の自立を弱め，新たな地域社会の再編が行なわれる可能性がある。

注

(1) 筆者のインドネシア村落調査は1973年7月～11月，1980年6月～1981年12月にかけて行なった。本稿は，1980年10月から1981年12月にかけて，おもにタナ・トラジャ県スセアン郡の村落調査で集められたデータをもとにしている。

(2) Frank, Lebar M., *Ethnic Groups of Insular Southeast Asia*, vol.1, Human Relations

Area Files Press, New Haven, 1972, pp.129-136.

(3) Kantor Statistik Kab. Tana Toraja（タナ・トラジャ統計局）による1980年実施の統計で，外国籍100人のほか，他種族の人も少数含まれている。なお種族ごとの統計はとられていない。

(4) 拙稿「サダン・トラジャ族――慣習法的秩序体系の研究――」立教大学文学研究科提出学位予備論文，1982年，399-400頁。

(5) Volkman, Toby, *The Pig has Eaten the Vegetables: Ritual and Change in Tana Toraja*,Cornell University, 1980, pp.52-53.

(6) タナ・トラジャ統計局，1980年。

(7) Saroanの語源は「報酬」という意味である。

(8) 拙稿「サダン・トラジャ族の葬送儀礼――社会統合の問題を中心に――」『史苑』第43巻2号，立教大学史学会，1984年にて詳細な報告を行なっている。なお，筆者の調査体験からすると，葬儀(そして肉の贈答)が行なわれる頻度は高い。ちなみにスセアン・スロアラ村1981年6月の死者は13名であった。

(9) 1965年9月30日，スカルノ大統領親衛隊のウントゥン中佐のクーデターにより軍と共産党が対立したが，現大統領スハルトを中心とした国軍が政権をとった。これ以降，コミュニスト達には1981年まで選挙権が与えられなかった。トラジャ社会では，現政権への気がねから表向きには彼らに肉の贈与をなさない。しかし実際には，彼らも様々な宗教儀礼に参加し，会食したり，また親族のメンバーが自己の取り分から肉の分与を行なっている。

(10) Volkman, *op.cit.*, p.52.
筆者の調査地域では農業協同組織としての機能はないが，フォルクマンはこの地域差を，水田面積の広いランテパオ周辺は多くの労働力を必要とするため，と説明している。

(11) Tominaa，トミナーはトラジャの伝統的宗教を熟知し，儀礼を司どる。日常生活では農業を生業としており，祭司職を専門職としているわけではない。

(12)『鈴木栄太郎著作集　II』未来社，1968年，419-468頁。

(13) Nooy-Palm, Hetty, *The Sa'dan-Toraja*, Leiden, The Netherlands, 1979, pp.5-6.

(14) 拙稿，前掲論文，1982年，103-105頁。

(15) タナ・トラジャ統計局，1980年。

(16) マルセル・モース「贈与論」『社会学と人類学』弘文堂，1968年。

(17) 会食が行なわれる頻度は高く，調査カンプン・バツツモンガの会食回数は月に8回を数えたこともある。ただしこれはカンプン単位でのものだけでなくサロアン単位のものも含む。会食が開かれる理由は，葬儀をはじめ建築祝い，結婚・離婚の成立，遠方からの家族の帰宅，病気の治癒等である。そしてこの他にもカンプンの枠を越えて，近い親族の儀礼に参加し会食を行なうことがある。なお，むら人の参加は強制ではなく，急用があれば不参加も咎められない。

(18) Cooby, Frank C., *The Churches on Sulawesi, Indonesia: Church & Society*, Friendship Press Inc., 1968, pp.81-82.

(19) Tandilintin, *Pong Tiku*, Yayasan Lepongan Bulan, Tana Toraja, 1976.
(20) Cooby, Frank C., *op.cit.*, p.82.
(21) *Ibid.*
(22) 拙稿，前掲論文，1984年。
(23) 同上。

SOCIAL UNITY IN THE SA'DAN TORAJA TRIBE
— Community Independence and Social Function of Religion —

≪ Summary ≫

Koji Akino

The Sa'dan Toraja Tribe lives in Central Sulawesi in The Republic of Indonesia. Although their native religion plays a very important role in their traditional customs (i.e., rituals, laws, etc.), Christianity has also come to be accepted in their community since the beginning of the twentieth century. Gradually, Christianity has influenced many people of the Sa'dan Toraja Tribe, as well as their traditional customs.

In this paper, I have studied the unity of one of the communities of the Sa'dan Toraja Tribe, based on my field research, which included living with the Sa'dan Toraja people for two years. During that time I examined a social function of their religion as it affected the unity of the people.

In conclusion, the native religion of the Sa'dan Toraja Tribe is an essential factor of their society and plays a paramount role in unifying the Sa'dan Toraja community. Due to its influence, they have successfully resisted the efforts of surrounding tribes to employ their own rule and customs. Although the common people of the tribe want to retain the community's independence, the Sa'dan Toraja administration which composes the new ruling class wants the tribe to be intergrated into the entire nation. Thinking that "Christianization" equals modernization, the administrators want national unity. If "Christianization" continues in the future, the Sa'dan Toraja customs which unify each community will gradually dissolve, and there will be no independent tribes remaining. Therefore, reorganization of the communities is likely to occur.